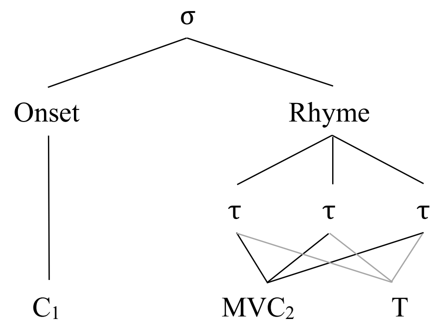
S-2

フィールドで得た音声データと音韻理論の接触点：

ベトナム語を事例として

山岡　翔（大阪大学／日本学術振興会；sho.yamaoka@gmail.com）

【要旨】本発表では山岡（2023）によるベトナム語ハノイ方言の音節の自律分節音韻論（Goldsmith 1976）をもちいた分析事例をとりあげて、フィールドデータをもとにした音声から音韻へのアプローチの可能性について論じる。山岡（2023）はフィールドで収集された音響データにもとづき、ベトナム語ハノイ方言の音節はつねに図のような構造をもつと主張している（ただし、τ は調音的に定義したモーラにあたる単位である）。その根拠は 3 つあり、①頭子音と韻の持続時間は補償関係になく時間的に独立していること、②韻は等時的にふるまう傾向にあり、韻内部の分節音には補償関係がみられること、そして③韻の内部は 3 つの調音的タイミングに分割される傾向がみられることである。この構造をもとに自律分節音韻論的連結のふるまいを観察すると、ハノイ方言のいくつかの音素の音韻的性質をあぶりだすことができる。本発表ではそのような性質のうち、①一般的に長母音・短母音と呼ばれている音素はその波及的性質の有無により捉えなおすことができること、および②声調 /4/ (ngã tone) と声調 /6/ (nặng tone) はともに喉頭化のターゲットをもつが、前者と後者では喉頭化の連結されるタイミングが異なることに言及する。



図：山岡（2023）の想定するベトナム語ハノイ方言の音節の構造

参考文献：

Goldsmith, John (1976) Autosegmental Phonology. PhD. Dissertation, MIT.
山岡翔（2023）『ベトナム語北部方言の音節論：音声から音韻へのアプローチ』京都：京都大学学術出版会.